

新国立競技場の聖火台に関する検討ワーキング・チーム（第2回） 議事要旨

日 時：平成28年3月25日（金） 10：30－12：00

場 所：中央合同庁舎8号館6階623会議室

出席者：中川 真 内閣官房新国立競技場の整備計画再検討推進室総括審議官
羽山 眞一 内閣官房新国立競技場の整備計画再検討推進室審議官
芦立 訓 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推
進本部事務局総括調整統括官
高橋 道和 スポーツ庁次長
中嶋 正宏 東京都オリンピック・パラリンピック準備局長
布村 幸彦 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副事務総長
中村 英正 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会企画財務局長
池田 貴城 日本スポーツ振興センター理事・新国立競技場設置本部長
下野 浩史 日本スポーツ振興センター新国立競技場設置本部総括役
平岡 英介 日本オリンピック委員会専務理事
山脇 康 日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会委員長

1. 議事

○東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、東京都、日本オリンピック委員会、日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会から「（1）聖火台の設置等に関する考え方」について説明があった。

【中村組織委員会企画財務局長】

- ・2020年大会での開会式の現時点でのスケジュールは、IOCが示しているスケジュールによると、大会の2～3年前に演出・制作に関するチームを選定し具体的な活動を開始することとされている。
- ・具体的な演出内容は、制作チームの下で検討され、最終的にはIOCの承認を得なければならず、大体、半年から1年前を想定している。
- ・現時点では、開会式についての検討はしていない。
- ・おそらくリオ大会後に、全体のコンセプトや制作チームをどう選んでいくかといった事務的な検討が開始される。
- ・開閉会式時の聖火台位置を決めるのは、まさに演出との兼ね合いがあるため、現時点では難しいと考えている。
- ・競技期間中、大会後の聖火台については、競技場の設計との関係で検討が必要となる可能性もあるという認識である。

- ・聖火台の設置スペースがあるのかどうか、耐荷重がどうなのか、設計にどのくらい影響を与えるのか、消防法との関係、工費・工期の関係で、いくつか選択肢を検討し、メリット・デメリットを整理して調整会議にかけるのがよいのではないかと。
- ・I O Cのガイドラインに準拠すれば、まずは中と外から見えるということで屋根周辺かスタンド上部が可能かどうかを検討することになる。
- ・中と外の両方から見えるのが難しいとなるとスタジアムの中から視認できる場所に置くことができるかどうか。
- ・それもダメな場合に最後にスタジアムの外という順番になる。
- ・前回質問があったガイドラインについてはガイドラインができたのが2005年、内容はほぼ2005年から変わっていない。
- ・現在のものは2015年9月に制定されている。
- ・また、2005年以前はまとまったガイドラインはなく、過去の大会に倣って実施されていた。

【中嶋東京都オリパラ準備局長】

- ・検討に当たっては、I O Cルールへの準拠、それから技術的な問題、設置に伴う消防法等の規制や配管・構造等の技術的観点をしっかり踏まえた上で決めていただきたい。
- ・聖火台というものが、新国立競技場の中で大会後にどういう位置づけになるのか、いわゆるレガシーとしてどうなっていくのかという視点も、検討に是非入れていただきたい。
- ・新国立競技場の整備にあたっては、国と都で、特に財政問題についてこれまで十分詰めてきた経緯があり、ワーキング・チームの基本方針である工費や工期を変更しないという点については、しっかりと守っていただきたい。

【平岡J O C専務理事】

- ・聖火台に関するI O Cガイドラインを極力遵守するということが絶対条件である。
- ・セレモニーとして、聖火の点灯は一番のメインイベントで、今の時点でできることは、設置が可能な場所の範囲を限定する程度であり、具体的な場所まで決定すべきではない。
- ・法的・物理的な規制範囲をしっかりとワーキング・チームでも確認した上で、演出やセレモニーを規制範囲の中でやっていただきたい。
- ・外部か内部かというのは、基本的には内部にしっかり置くべきと考える。
- ・I Tとか映像とか様々な演出方法があり、64年と同じようにガスで燃やす方法と違う方法もある。

【山脇J P C委員長】

- ・「I P Cの条件でI O Cのものと違う点があるか」については、I P Cとしては、I O

Cの条件を満たしていればよく、場所やセレモニーについて特別な条件はない。

- ・ I O Cや I P Cと組織委員会が最終的に調整しなければならないが、 I O Cと I P Cが同意した案で、 J P Cとしては問題ない。

○各機関からの説明に関して質疑

【高橋スポーツ庁次長】

- ・ レガシーについて、2020年大会の聖火台を何らかの形で保存することについては、出席者間で特に異論はないと思うが、2020年大会での位置のまま保存するのか、それとも別の場所に移すのかは、後利用とも絡んでくる。
- ・ 後利用については、今、別途、政府の中で検討しているので、例えば「移動しない」ということまでワーキング・チームで決めてしまうと、後利用について制約となるので、こういった形で保存するかについては、後利用が決まる時に検討することが適当ではないか。

○日本スポーツ振興センターから「(2) 聖火台の設置に伴う課題等」について説明があった。

【池田 J S C 理事】

- ・ 聖火台は、消防法の法令体系の中では、「炉」と「裸火」に関する規制を受ける。
- ・ 「炉」については、原則として、周囲に5m以上、上方に10m以上の空間確保が必要。
- ・ ただし、消防署長等が、「同等以上の安全性を確保することができる」と認めた場合には例外的な取扱いも可能となる。
- ・ 現時点では、聖火台の具体的な形状や大きさ、熱源がわからないと協議ができないため、明確なことは申し上げられない。
- ・ 運用上の課題について、「聖火台自体が見えるか」と、「聖火台で遮られ競技が見えなくなるか」の2つの視点で検証する必要がある。
- ・ 屋根の上部に設置するとした場合、50%~70%の観客席から聖火台が見えない可能性が高い。
- ・ スタンドの一部に設置する場合は、一定程度の客席から聖火台が邪魔になって競技が見えなくなる蓋然性が高い。
- ・ フィールド上に設置する場合は、すべての観客席から聖火台が見える。
- ・ スタジアムの外に設置する場合は、客席からは聖火台が見えないが、逆に、競技場に入れない外の方からは聖火台が見える。
- ・ 技術上の課題については、聖火台の形状や火の大きさ、設置場所に応じて、構造的な検証、特に屋根に設置する場合には耐荷重や風荷重、配管設置等について検証する必要がある。

【下野ＪＳＣ総括役】

- ・ 外部に置く場合、観客の滞留するスペースを確保しないと危険であること、また、緊急車両が入構する経路等があり、自由自在に好きな場所に置くことはできない。

○日本スポーツ振興センターから「（３）１９６４年東京大会聖火台の保存場所の検討状況」について説明があった。

【池田ＪＳＣ理事】

- ・ １９６４年の時の炬火台については、昨年８月に関係閣僚会議が決定した整備計画において、「最終的な保存場所をＪＳＣは早急に検討し、決定すること」とされている。
- ・ これを受けて、ＪＳＣにおいてアドバイザリー会議を設けて、検討している。
- ・ アドバイザリー会議では、競技場の東ゲートの正面に野見宿禰とギリシャの女神を配置するとともに、その前のスペースに炬火台を置く方向で検討が進められている。

以上